

新暦78年、私はある連続レイプ犯を追っていた。

初めて存在が確認されたのは約一年前。だが、未だに犯人の名前も人相も特定できていない。

その男は、ただのレイプ犯ではない。魔導師であると同時に、あるレアスキルを持っている。

そのレアスキルの名は『常識改変』。平たく言えば、強力な洗脳魔法だ。私たちの持っている常識を、向こうの都合の良いように一瞬にして書き換えられてしまう。

その能力を使い、犯人は何百人もの女性を洗脳し、レイプした。常識を改変された被害者は自分が辱められている自覚がないため、無抵抗に犯されるしかない。

さらに洗脳状態にある間は記憶がないらしく、洗脳を解除された被害者全員がレイプされていることを全く覚えていないのだ。

絶対に許せない。レイプするために魔法を使い、多くの女性の尊厳を踏みとじるだなんて。

私が一刻も早く逮捕してみせる。これ以上、被害者を出さないためにも。

私はフェイト・T・ハラOWN。人は私を——爆乳ドスケベ執務官と呼んだ。

1

時刻は23時を回っていた。

女性が何者かに強姦されたという通報を受け、私はすぐに事件現場である某ラブホテルに急行した。

私が部屋に到着すると、先に現場を調べていたティアナが私の存在に気づき、一旦作業を中断して敬礼する。

「お疲れ様です、フェイトさん」

「ん、被害者の状況は？」

私も敬礼して返し、まずは被害に遭われた女性について問いかけた。

「被害者の女性は外傷無し。発見された時は気絶しており、病院には搬送されましたが命に別状はないそうです」

ティアナの報告にとりあえずほっと一安心し、次に現場について尋ねた。

「それで…何か見つかった？」

「はい。これが…」

ティアナは袋詰めされた証拠品を手渡す。中身は、色とりどりの使用済み

コンドームだった。

私は袋を手に取り、中身をじっくり見る。使用済みコンドームは一つだけでなく、10個以上は入っていた。しかも、一個一個のコンドームに詰まった精液が異様に量が多い。絶倫である証拠だ。

それと同時に件の避妊レイプ犯の犯行であることの証明でもあった。避妊レイプ犯は犯行を行う際、生ハメセックスではなく、コンドームを用いたゴムセックスを好む習性があると捜査で明らかになっている。

そして、使用した大量のコンドームはこうしてレイプ現場にあえて残しているのだ。己の絶倫を自慢するかのように。

「…ッ…」

私は腸が煮えくり返るような思いがした。

本来セックスとはメスに子を孕ませるための生殖行為のはず。レイプするのならばめて、ゴムなどつけずにチンポ汁を全て子宮に注ぎ込み、妊娠させるべきじゃないのか。

私の義母であるリンディ・ハラOWN授乳統括官は女性の望まぬ避妊を防ぐために『コンドーム取締法』を制定させたが、避妊レイプ犯を初めコンドームを使いたがる男性は少なくなく、未だに非合法に生産・密売されている。

さらに近年では快感を倍増させるコンドームまで生産されるようになってしまった。依存性も高く、安値で売られているため、コンドームを違法使用する男性が後を絶たない。

もちろん、ゴム無しセックスしてても無責任な外出しは以ての外だ。セックスするなら、最後はしっかりと責任を以てチンポミルクを子宮に中出しすることが最低限のセックスマナーだ。

その点、私の友人のユーノはそこをしっかりと弁えている。私の親友であるなのとは際を始めてから何百回もセックスしているが、コンドームは一度も使わず、外出しもしたこと無いらしい。

そのためなのはドスケベ女性器はすっかりユーノの淫獣チンポ一色に染まっている。二人のあまりのラブラブっぷりに羨ましく思ってしまう。世の男性はユーノを見習うべきだ。

「…調べさせてもらうね」

私は一旦怒りを鎮め、袋を開けた。使用済みコンドームを一つ取り出し、結び目をほどく。

むあっとした熱気と共に、生臭い香りが私の鼻の奥を心地よく刺激する。

ゴムに密封された精液の中にいったいどれだけの精子が泳いでいるんだ

ろう。卵子に着床したかったはずなのに、持ち主の身勝手な避妊で吐き捨てられた精子たちの気持ちを考えると胸が締め付けられる。

(だけど、これは貴重な情報源…。被害者や、精子たちの犠牲を無駄にするわけにはいかない)

私はコンドームに入ったその精液を自分の口の中へ流し込んだ。

「んっ…ちゅるっ、じゅるるる…！」

精液を口内に収めた私はあえてすぐに飲み込まず、ゆっくりと瞳を閉じて舌に全神経を集中させる。精液の味や食感を確かめるように口の中で丹念に転がしながら、私は魔法を発動した。

『ザーメンスキャン』——これは文字通り精液を解析し、その持ち主の情報を割り出すSランクのドスケベ魔法。避妊レイプ犯を逮捕するために習得したものだ。

ただ、精液が新鮮であれば新鮮であるほど得られる情報の精度が上がるけれど、現場に残された精液は射精してからだいぶ時間が経っているため事細かな情報は得られないかもしれない。

愛機のデバイスであるバルディッシュに補助してもらいながら、私は精液の解析を始める。

(味はこってりで濃厚…ゼリーみたいなぶるつき具合い…恐らく年齢は五十年代…。身長はだいたい175cm…体重は80キロ前後…)

更なる情報を得るため、私は精液を口に含んだまま自分の胸をぎゅっと掴んだ。胸元の生地をパンパンに押し上げる大きな膨らみを制服の上からしっかりと揉みしだく。

95cmのGカップ——それが私のバストサイズだ。元々バストの大きさには自信があり、三年前のJ S事件のときでも87cmはあった。

だけど、私はそれに傲ることなく、更にバストを大きくさせるために筋トレや、マッサージを欠かさず行っている。

何故、そこまでバストを大きくさせているかということ、バストサイズが90cm以上の女性にだけ『常識改変』の洗脳が効かないということが捜査の調べで明らかになったからだ。

それにバストが大きければ大きいほど、それを突き出されたときの圧迫感でオチンポ犯罪者の思考を鈍らせ、身動きを取れなくすることもできるため、私のようなオマンコ執務官は巨乳であることは必須事項だ。

私は胸を揉み回しながら精液の解析を続ける。『ザーメンスキャン』の精度を上げるために、解析しながら自分の身体を愛撫するのは非常に有効だ。もちろん胸である必要はなく、尻でもクリトリスでも良い。

(オチンポの長さは18cm…カリ高で、極太…チン皮はずる剥け…。厄介なオチンポだね…)

避妊レイプ犯のオチンポを解析した私は戦慄し、思わず子宮を熱くさせた。今まで何十人もオチンポ犯罪者を検挙してきたが、ここまで大きいサイズのオチンポは初めてかもしれない。『常識改変』を無効化できても、苦戦は必至だ。

だけど、私はオマンコ執務官のプライドにかけて、絶対に諦めるわけにはいかない。

「聞き込み調査をします。…ティアナ、後はお願いね」

「了解です」

ティアナの敬礼を背に、私はレイプ現場を後にした。

ラブホテルから出た私は目撃者がいないか周りを見渡す。すると、一人の男性を発見した。

覆面を被り、ぴちぴちのセクシーなブーメランパンツを穿いているだけの至って普通の格好だ。だけど、身長は私よりも一回り高い——170cm以上で、筋肉質な体型をしている。しかも、オチンポと金玉を包み込むブーメランパンツの膨らみが大きく、もっこりとしていた。

ちょうど『ザーメンスキャン』で解析した犯人の特徴とほぼ一致している。だが、まだ断定したわけではない。さらに詳しく調べてみる必要があるようだ。

「すみません、少しお時間よろしいでしょうか？」

私は自慢の巨乳を見せつけるようにぐっと胸を張り、男性に歩み寄る。

コツコツとヒールを鳴らしながら一歩、また一歩踏み出すたびに制服の胸元がゆさゆさ揺れる。

「な、何だね君は…？」

男性は少し動揺した様子で、近付いてくる私の豊満ボディをチラチラと見てきた。

きっちりと制服を着込んで肌は一切露出していないが、そこに押し込められたセクシーな肉体のボディラインは到底隠し切れるものじゃない。

前方に大きく突き出た、破壊力抜群のミサイルバスト——あまりにも立体的に突出しているから胸元の生地をパンパンに押し上げ、今にも衣服のボタンを弾け飛びそうになっている。

そんな脂肪の塊の乳肉とは対照的にウエストはくびれができるほどにきゅっと引き締まっていて、そのギャップに見るもの全てを誘惑する。

さらに武器はバストだけじゃない——後方からも自動迎撃できる豊満ヒップは面積が広く、肉厚だ。尻好きのオチンポ犯罪者が立ちバックで私をレイプできたとしても、しっかりと脂の乗った尻肉がぶるぶる揺れながら弾き返すことができる。しかも安産型であるためオチンポ犯罪者の精子で妊娠した際、出産するにも好都合だ。

そして、黒いパンストに包まれた脚は細く、長い。それでいて、太腿はむっちり肉感的。そんな美脚をよりいやらしくするためにパンストのデニール数は25以下に指定している。パンストの透け具合と、生地の光沢感で足フェチ・パンストフェチのオチンポ犯罪者を一瞬にして脳殺する。

スリーサイズは上から95・60・88。巨乳フェチ、尻フェチ、足フェチ——ありとあらゆるオチンポ犯罪者の性癖に対応し、精液を搾り取るために仕上げてきたセックス専用のドスケベボディだ。

制服を着てても、ただその場に立っているだけで股間をムラムラさせるらしく、目の前の男性の股間がむくむくと膨張し始めた。ブーメランパンツに包まれたオチンポの膨らみを一瞥した後、私は真っ直ぐな目で男性の顔を見つめた。

「私、こういう者です」

自分の身分を証明するため、私はタイトスカートのホックを外し、ファスナーを一気に引き下ろした。

タイトスカートが地面にすんと落ち、下半身を露わにさせる。

私は特殊な任務のとき以外はショーツを穿かず、普段はパンストしか着用していない。しかも、ただのパンストではない。クロッチの部分の生地だけぽっかりと穴が空いてる仕様になっている。オマンコ執務官として、いついかなる時もセックスできるように開発された私専用のセックスパンストだ。

私はパンストに包まれた美脚を大きく広げ、ぐっと腰を落とした。男性に見せつけるように股間を突き出し、両手を使ってラビアを押し広げた。

そこに隠されていたのは——湯気が立つほどにホカホカで、綺麗なピンク色のマン肉。

『ザーメンスキャン』で避妊レイプ犯のオチンポの形状を特定したことにより私のドスケベマンコはすっかり発情し、マンコ穴がひくひくと震えながら愛液を分泌させている。

下品な姿勢を維持しつつ、私はトロついたぶりぶりマン肉を提示しながら男性に自己紹介した。

「私は時空管理局、オチンポ射精管理部のオマンコ執務官——フェイト・T・ハラOWNです。年齢、22歳。経験人数は1106人。中出し経験回

数は1620回。好きな体位は種付けプレスです」

時空管理局のオマンコ局員は身分証明をするために自分のオマンコを見せながら、セックス事情を公開する決まりになっている。

近年、局員を装った詐欺被害が急増されたために採った対応策だ。私自身も本物か偽物かもわからない身分証明書を提示するよりも、偽りようのないオマンコを見せた方が遥かに正確性があると思っている。

「実はすぐそのラブホテルでコンドームを違法使用した強姦事件が発生し、犯人を探し出すために今聞き込み調査をしています。…オチンポIDを確認させてもらってもよろしいでしょうか？」

男性を聞き込み調査をする際、まずその男性のオチンポを徹底的に調べる必要がある。長さや、太さ、匂い、反り返り具合、金玉の重さ等——違法性がないかを確認したうえで、聴取しなければならない。

「あ、ああ…」

男性は少し躊躇した様子でぴっちびちのブーメランパンツに手をかけ、ゆっくりと引き下ろした。

ぶるんっ！

勃起チンポの先端がブーメランパンツに引っかかったため、脱ぐと同時に長太い竿が大きく跳ね上がった。

(結構デカイね…)

オチンポの大きさに思わず感心してしまう。長さも、太さも成人男性の平均サイズを軽く凌駕している。金玉も大きく、多量の精液を溜め込むこともできるはず。オチンポ犯罪者なら厄介だけど、セックスフレンドなら大歓迎だ。

だが、

「…まだ完全に勃起していませんね？ 見たところ、そのデカチンポの勃起比率は七分勃ちか八分勃ち。ブーメランパンツから出したときのオチンポの跳ね具合、跳ねたときの音から計算しても間違いないと思います。…違いますか？」

私の指摘に、男性は戸惑った様子でこくと小さく頷いた。

千本以上のオチンポを見てきたオマンコ執務官の目は誤魔化せない。オチンポの大きさをサバ読みするために、勃起をコントロールするオチンポ犯罪者も少なくない。

目の前の男性がオチンポ犯罪者だと決まったわけではないが、どちらにせよオチンポがこの状態では聴取できないためフルボッキさせる必要がある。

私は衣服に手をかけた。ジャケット、ブラウス、アンダーシャツ——不要

なものを手早く脱ぎ捨てる。そして、最後にブラジャーを外すと、たつぷりと脂肪を蓄えたGカップバストがぷるんっと震えた。

私の乳首に金色のニップルリングが詰められているが、これは私のデバイス——バルディッシュの待機状態だ。乳首に詰めていれば紛失や盗難の防止になるため、オマンコ局員のほとんどがデバイスの待機状態をニップルリングやニップレスにしている。

身につけているのがニップルリング、パンスト、パンプスのみとなった私は股を大きく広げながらぐっと腰を落とし、爪先立ちになるように踵を上げた。背筋を伸ばして巨乳を強調させ、両手は頭の後ろに組む。きちんと毛を処理している腋の下はしっかりと汗ばみ、腋汗の甘い香りを男性に嗅がせていく。

腋はオマンコや乳首と同じくらいに視覚的に男性を興奮させられることが近年の研究で明らかになってから、私は積極的に腋を見せるようにしている。しかも私の腋は何本かシワがあるだけでなく、少し黒ずんでいるため、その生々しいセクシーな腋性器で何百人ものオチンポ犯罪者を脳殺させてきた。

「んっ、ふっ、んっ、ふっ♪」

私は腋を全開にしたままガニ股で腰を前後左右に振り始めた。

「んっ、ふっ♪ これはドスケベ魔法『腋見せガニ股ダンス・セックスアピールシフト』。エロボディを最大限に利用し、腋やガニ股だけでなく、キレのある腰振りや豪快に揺れるデカパイも見せつけることで勃起不全の男性でも確実にチンポをフルボッキさせることができる魔法です。んっ、ふっ、んっ、ふっ♪」

私は下品な体勢を維持しながら速く、激しく、リズムカルに腰を振るう。プロのストリッパー顔負けの腰振りに合わせて、前方にドンと突き出たミサイルバストがたつぷんっ♡ たつぷんっ♡ と大きく揺れる。

私は元々汗をかきやすい体質なため、スケベな腰振りを繰り返していくと全身から汗が分泌され、メリハリのあるダイナマイトボディがテカテカになる。特に蒸れやすい腋と下乳の汗の量は凄まじく、そこから香る甘ったるい匂いで男性の嗅覚を犯していく。

魔法の効果はてき面で、元々反り返っていた男性のチンポがさらに角度を上げ、亀頭が遅しく真上へ向いた。

(…っ、何て大きさ…)

男性のフルボッキ状態を目の当たりにした私はごく…と生唾を飲み込んだ。長さはおへそを軽く越え、それを支える竿はがっしりと太く、亀頭は立

体的で面積が広い。

(長さは18cm…太さ4cm弱…亀頭の直径5cm…。形状だけでもSランクに該当するデカチンポだね…)

オチンポのエキスパートであるオマンコ執務官の私は目視だけで男性の勃起チンポを測定した。これほどの大きさなら、一目見ただけでもほとんどの女性は屈服し、全裸で土下座しながら中出しを懇願したくなるだろう。

私でさえ今すぐに押し倒して胸の谷間に挟んでパイズリしたり、騎乗位でガンガン腰を打ちつけたくなる。危険なチンポだ。

「…では、オチンポIDを確認させていただきます」

私は男性の前で膝立ちになり、デカチンポに顔を近付けた。

「……………」

鼻息がかかるほどの距離でチンポを凝視し、怪しいところがないか入念にチェックする。

(チン皮はずる剥け…亀頭やカリ首にチンカスは無し、だね…)

もしチンカスがついていた場合、オマンコ執務官は口を使って即掃除しなければならない。汗とおしっこと精液が凝縮して発酵させたカスを放置させてしまったらオチンポが病気になるかもしれない恐れがあるからだ。

ちなみに、私はチンカスが大好きだ。塩気が効いた濃厚な味わいと、鼻にツンと来る強烈な香りは、まるで高級なチンカビチーズだ。仕事終わりに包茎カス溜めチンポを捕まえては、つつい食べ過ぎてしまう。

男性のチンポにチンカスがないことに少し残念に思いつつ、オチンポIDチェックを続ける。

「…見たところ怪しいところはないですね。失礼ですが、実際にオチンポを触らせていただきます。…バルディッシュ、『チンコキグローブ』展開」

『Yes, Sir.』

もちろん目視だけで調べられないところもある。私は愛機に命令し、両手限定でバリアジャケットを展開した。

金色の光が私の手を包み込み、数秒にして消えると黒い手袋が姿を現した。生地はエナメル質で極薄、手全体にぴったりとフィットし、街灯の明かりで光沢している。

『チンコキグローブ』——男性のチンポを詳しく調べる際に使用し、その滑らかさとひんやりとした感触で男性を射精させることもできる特殊な手袋だ。

私は両手を組み、手袋の生地をなじませるように指を動かすと、エナメル質のグローブがキチュッ、キチュッと音を立てる。

最後にグローブを手首までしっかりと詰め直してから、オチンポの竿をぎゅっと握り込んだ。

「おほっ…！」

ゴシュツ、ゴシュツと長太い竿をシゴくと男性は身体を震わせながら野太い声をあげた。エナメルグローブでシゴいているだけで何故そこまで気持ち良いのかと疑問に思ったが、チンポを調べることに集中する。

チンポの血管は太く、そこを通る血液の流れは非常に良い。勃起するうえでチンポの血流は重要だ。

次に金玉を掴み、痛くならない程度の絶妙な力加減でコリコリと揉みほぐす。

(金玉も平均サイズ以上…重さもずっしりしている…。だけど、この大きさとこのコリコリ具合で、この重量はちょっと軽すぎる…)

私は再び竿を掴み、根元をしっかりと固定すると鼻の穴を亀頭に押しつけた。

「すう〜〜〜…ふう〜〜〜…すう〜〜〜、んふう〜〜〜♡」

私は目を閉じ、嗅覚に全神経を集中させて亀頭の匂いをチェックする。鼻にツンと来る独特な香りは間違いなく加齢臭。中年男性特有の体臭だ。

そして、もう一つ気付いたことがある。

「すう、ふう…あなたのオチンポから除菌シートの香りがします。何故、除菌シートでオチンポを拭いたのか理由を伺ってよろしいでしょうか？」

私が男性の顔を見上げながら質問すると、男性は「潔癖症だから」と少しくぐもった声で返答した。

本当にそうだろうか？　そういうことをする男性も少なくないが、私の予想ではコンドームのゴム臭を消したかったからではないのか。

まだハッキリとしていないけれど、この男性が避妊レイプ犯である可能性がより高くなった。

「…わかりました。オチンポIDの確認は終わりました。それではいくつかあなたにお聞きします、アナルを突き出してください」

私の言葉に従い、男性は素直にその場で四つん這いになり、お尻の穴を見せつけた。オチンポのときと同様、私は息がかかるほどの距離にまで顔を近づけ、黒手袋を填めた手で尻たぶを掴んだ。親指で左右にくぐっと押し広げた瞬間、酷い悪臭が鼻の奥を強烈に刺激した。

中年男性のアナルのシワをじっと眺めつつ、私は冷静に尋ねた。

「…質問します。どんな小さなことでも良いので、正直にお答えください。この辺りで怪しい人物を見かけませんでしたか？　身長は175cmくら

いで、チンポがおっかい五十代の男性です」

「え、えっと…んぐうッ！」

私が臭いアナルを舐め始めると、男性は呻き声をあげながら腰を震わせた。私が力を込めて尻たぶを掴んでいるため、逃げることは決してできない。

アナルは情報の宝庫と言われており、尋問や職務質問する際、アナル舐めは非常に効率が良いのだ。

「舌を差し込みます。…じゅるッ！　じゅるるるるッ！！」

私は根元まで舌を挿入させると、縦横無尽に激しく動かした。オマンコ執務官として、千人以上の男性のアナルを舐めてきたため舌の筋肉が他の人より発達している。

その強靱な舌を使って、ぞりぞりと男のケツ穴をほじくっていく。

「じゅぼッ、じゅぼッ！　さあ、質問に答えてください。じゅるッ、じゅぶッ！　デカチンポをぶら下げたおっさんを見かけませんでしたか？　じゅっぶんッ、じゅっぶんッ！」

「し、知ら、ない…！　おぐッ、おほッ！」

尻穴に舌を突っ込まれながらも言葉では否定する男性だが、アナル舐めのプロフェッショナルである私の目は誤魔化せない。

「ぷちゅっ…このアナルの味と臭み…そして締め具合からして、あなたは何か隠し事をしています。もっとアナルの力を抜いて、お尻を突き出してください。正直に答えないと、もっと激しく責め立てます」

私は黒手袋を填めた両手で、デカチンポをキツく握り込んだ。左手で長太い竿を、右手で大きな亀頭を愛撫する。

滑らかで、ひんやりとした感触のエナメルグローブで竿を上下にシゴき、亀頭は磨きあげるように掌で撫でまわす。もちろん、アナル舐めも続けながらだ。

「れろっ、れろれろ…！　いかがでしょうか？　ツルツルのチンコキグローブを使った竿責めと亀頭責め、アナル舐めも加わった三点同時攻撃。こんな快感、味わたったことないでしょう？　ちゅぶっ、ぷちゅっ！」

手首のスナップを利かせ、牛の乳搾りようにチンポをゴシュゴシュとシゴきまくる。私のドスケベ攻撃が効いている証拠にチン先から我慢汁が溢れ、亀頭責めしている方の手袋がベトベトに汚れていく。

たとえ男性が何も喋らなくても、射精すれば問題ない。事件現場で口にしたら精液の味や、ぶるつきはしっかりと覚えている——もし、この男性の精液と一致すれば避妊レイプ犯であることの証明になる。

私は男性を射精させるため、アナルを激しく舐めつつ、チンポをシゴくスピードを速くさせた。

「ちゅるッ、じゅぷッ、じゅるるッ！ ちゅぼッ、ちゅぼッ！ ちゅうううううッ！」

シュッ、シュッ、シュッ、シュッ！！

「あ、あぐ…！ ちょ、ちょっとやめ…んぐうッ！」

男性の喘ぎ声を見殺し、私はひたすらくっさいアナルにしゃぶりついた。舌を尖らせながら顔を前後に振って、じゅぼッじゅぼッとケツ穴への抜き差しを繰り返す。すると――

ぶッ…！！

何の予告もなく、中年男性のケツ穴から一発のオナラが放たれた。とてつもない悪臭のガスが私の顔面に吹きかけられる。

普通の人であれば絶対顔を背けたくなるだろう。だけど、私は――

「すう～～、ふう～～…♡ すう～～、ふう～～…♡」

鼻の穴を限界まで大きく膨らませ、中年男性のオナラを嗅ぎまくった。男性のオナラも貴重な情報源であるため、くっさいおっさんガスを肺や胃に取り込むように深く長く深呼吸する必要がある。

やはり中年男性のオナラは、他の年代の男性と比べて圧倒的に臭過ぎる。生ゴミの方が遥かにマシかもしれない。だけど、悪臭フェチである私は中年男性特有の、鼻がもげるほどの腐敗臭に興奮してしまう性癖を持っているため、一発のオナラを嗅いだけで軽くイってしまった。

道端でおしっこをする犬のように、ピューッと噴いた潮で地面を汚してしまっただけ、アナル舐め手コキを続行する。

「じゅるッ、じゅるッ、じゅるるううううッ！ ちゅぼッ、じゅるるッ！

じゅっぼッ、じゅっぼッ！」

「おぐッ、おッ、おほッ…！！ で、出る、出るう…！！」

「ちゅぼッ、ちゅぼッ！ ちゅぼッ…はい、出してください。精液とオナラ、同時に出してください。じゅるるるるるるるーッ！！」

私は男性の大きな尻に顔を密着させた。中年男の汗ばんだ尻肉に顔全体が包まれ、子宮がキュンと疼きながらも、アナル舐め専用のスケベ舌に力を込めた。

舌の筋肉を最大限に使って、中年男性のケツ穴をほじって、ほじって、ほじくりまくる。攻撃を防ごうとアナルがきゅっと締まってくるが、私の舌の力がそれを上回る。

舌をドリルのように回転させながら、アナルの奥へ奥へと差し込み、汚ら

しい肉穴をゴリゴリ摩擦する。

「んッ、じゅるるッ！　じゅっぽッ、じゅっぽッ！　ふんッ、ぶっちゅッ！
じゅるるるるるうー……ッ！！」

最後のトドメとして、エナメルグローブの指先でぐりぐりと尿道をほじくった。チンポをコキ下ろすために作られた手袋の尿道責めをされれば、いかにデカチンの中年男性であろうと射精は免れない。

「イ、イぐッ…！！」

男性が大きく腰を震わせた。

ぶりゅッ！！　ぶりゅりゅううーッ！！

中年男性の汚い尻に顔を埋めているから何も見えないが、破裂するような射精音と掌に広がる生暖かい感触で、男性が射精したんだと理解できた。

ぶッ！　ぶうッ！！　ぶふうううううううううううー……ッ！！

「すううううう～～～、んふうううう～～～…♡　すううううう～～～、おほおお～～～…♡」

顔面ゼロ距離で何連発もオナラを吹きかけられた。

臭さも倍増しているため、さすがの私も野太いオホ声を我慢することができず、五回はイってしまった。これほどの臭さなら香水にして常に持ち歩きたいくらいだ。

やがて男性の射精が終わり、名残惜しいが私はお尻から顔を放す。射精を受け止めた右手を眺めると、大量のザー汁が黒手袋全体にべったりと付着していた。軽く手を揺らすと、ゼリー状の精液がぶるぶると震える。

(すごい量…中に出されれば、一発で妊娠するかも…)

私は濃厚なおっさん体液に見惚れつつも、香ばしい匂いを放つゼリーザーメンを自分の口に近付けた。

「ずっ、じゅる…ずずっ、じゅるるるるるっ…！」

手袋に付着した精液を、わざと音を立てて囁いていく。精液を口にする際、それを提供してくれた男性に聞こえるように音を立てることが全世界共通のセクスマナーだ。もし、この決まりを破れば、私は確実にオマンコ執務官の免許を剥奪され、有罪判決を受けることになる。

「んう…♡」

全ての精液を舐め取り終えた私は、あえて飲み込まず、口の中に溜め込んだ。

おっさんの精液で頬を膨らませつつ、射精を終えて満足げに息を吐いている男性の前に膝をついて座る。覆面で覆われている男性の頭を掴み、私の顔の前に引き寄せると、

「んばぁ〜〜〜…♡」

私はゆっくりと口を開け、口内に溜め込まれたぶるっぶるの精液を見つけた。トトロでホカホカの新鮮ザーメン——私の卵子に着床したかったはずの何億ものおっさん精子が私の口の中で、オタマジャクシのように活発に泳ぎ回っている。

そんな精子たちを慰めるように、私は舌を使って大量の精液をかき混ぜ始めた。

「んふううー…♡ んふううう〜〜〜…♡」

鼻の穴を大きく膨らませ、イカ臭い鼻呼吸を繰り返しながら中年金玉から抽出されたザーメンミルクを何度もかき混ぜていく。

男性の精液は量が多いだけでなく粘度も高いため、舌でかき回すのは至難の業。だけど、私は中年男性のアナル舐め任務で舌の筋肉が鍛えられているため、精液の水溜まりの中でも難なく舌を動かすことができる。

空気を含ませるようにかき混ぜていると、私の口の中で精液が泡立っていくのを感じた。そこで私は口を閉じ、第二段階へと移った。

「んっ、ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ…♡ んふー、ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ…♡」

口内全体におっさんザーメンの味や、匂いを染み込ませるように丹念に口をゆすぐ。

「くちやくちやくちゃ…♡ くちゅぐちゅぐちゅぐちゅ…♡ ぶちやくちやくちゅぐちゅ…♡」

時折り、口を開閉させ、精液の泡立ちや口内中に伸びる生臭い粘糸を男性に見せつける。

私のドスケベビッチな行動を見せられた男性は鼻息を荒くさせた。一度萎えていたチンポが再び膨らみ始め、ぐっと反り返っていく。

デカチンポをチラリと一瞥した私は唾液で薄くなってしまった中年体液を一気に胃の中へ流し込んだ。

「ごくっ…んっ、ごきゅ…♡ んほお〜…♡」

鼻から抜けるおっさんザーメンの悪臭に、思わず下品な息を吐いてしまった。これほどのエグ味と臭味があれば、間違いなくザーメンミルクサーバーとして高収入の安定した仕事に就けるだろう。

美味しいザーメンを飲ませてくれたお礼に三時間の窒息ディープキスをしたところだが、私は心を鬼にして男性に一つの事実を突きつけた。

「あなたの精液を確かめた結果、事件現場に残されたコンドーム——そこに入っていた精液の成分と一致しました。僅かに味が薄まり、量も少なくなっ

ていましたが、精液入りのコンドームの数…金玉の体積と重さを計算に入れば誤魔化しようがありません」

「…ッ…」

図星を突かれた男性は悔しそうに歯噛みし、何も反論することができなかった。そのリアクションだけで、避妊レイブ犯であることの証明だった。

私は男性に対して、有無を言わさないはっきりとした口調で告げた。

「——23時30分。あなたをコンドームの違法所持及び、避妊強姦罪の容疑で拘束させていただきます。本局までご同行をお願いします」

ついに私は、コンドームを用いた悪辣非道なオチンポ犯罪者を追いつめることができたのだ。

達成感に胸がすく思いをしながら、男性を拘束魔法で捕らえようとしたその時だった。突如、男性が今被っている覆面の中に手を入れた。

ごそごと漁ってから取り出したのは、ピンク色の薄いゴムだった。

(まずい、コンドームだ…!!)

私はすぐさま男性を捕縛しようとしたが、向こうの方が早かった。男性は一切無駄のない手付きで、一瞬にして逞しいデカチンポにコンドームを装着した。

避妊セックスを目的とした最凶最悪なゴムの膜が18cmの巨根にぴっちりと密着し、明かりに照らされて光沢を放つ。

おっさんチンポの華麗なドレスアップに思わず見蕩れてしまっていた私だったが、あることに気が付いた。コンドームの周りに、真珠ほどの大きさの突起物がいくつもついていた。

(イボ付き…!?)

イボ付きコンドーム——それは周りについた突起物で女性の膣壁を擦りあげるために開発された女殺しのコンドームだ。

オマンコに出し入れされるだけでも、その凄まじい快感ダメージで女性はほとんど抵抗できずに一方的に犯されるしかない。

私はオマンコ執務官として様々なオチンポを相手にしてきたが、イボ付きコンドームを装着したチンポと対峙するのは初めてだ。弾力性のある、コリコリとしたイボでマン肉を擦られれば私でも危うい。しかも、相手は巨根だ。

(挿入だけは阻止しないと…!!)

私はデバイスを起動させるため、両腋を見せつけるように手を頭の後ろに組んだ。さらにパンストに包まれた美脚をガニ股に開いた。

「バルディッシュ! セットアップ!!」

『Set up.』

乳首リング形態の愛機が輝きを放ち、私の豊満ボディにバリアジャケットを装着させた。

下半身のパンストはそのままだ、胴体に黒くぴっちりとしたレオタードが密着する。

『真ソニックフォーム』——防御力を捨て、スピードとボディラインの強調を重視させたドスケベバリアジャケット。この卑猥な格好を見て、シコった男性はたくさんいるだろう。

だが、この『真ソニックフォーム』はオチンポ犯罪者に対抗するために改良が加えられている。薄い装甲をさらに薄くさせ、乳首の形がくっきりと浮かび上がっている。股間部分の形状はハイレグで、オマンコへの食い込むを強化させると共に尻たぶを丸出しにさせている。そこへ、私のトレードマークであるデニール25の黒パンストで下半身の軽装をカバーする。

もちろん、クロッチの部分は穴が空いており、いつでもオチンポを突っ込ませられる設計にしてある。

これが新たなバリアジャケット——『真ソニックハイレグフォーム』だ。

だが、股間をガニ股に広げたことで、チンポを挿入しやすい体勢になってしまい、私はまんまとイボ付きコンドームを装備したデカチンポを挿れられてしまった。